

【あららかま】

「こないだ、むらはずれで、へんなおじさんに、おうてのう」

ぼくはいいました。

「変なおじさんは、この村にはたくさんおりますからねえ」

懐爺はいいました。

「かいじいは、へんなおじいさんじゃからのう」

ぼくは余計なことをいいました。

「わたしのことは、ほっといてください」

懐爺はむくれました。

あるいは、むくれたふりをしました。

「だども、へんなおじさんは、むらびとじゃあなさそうじゃ」

「そうですか、わかりますか」

「むらびとは、むらびとの、においがするからのう」

「そういうもんですかねえ」

「そういうもんじゃ。わしのはなは、きくでのう」

「はなはだ手前味噌ではありませんか」

「みそも、しょうゆも、あるもんか」

「それではわたしは、これで」

懐爺は祠に引っ込もうとしました。

このごろ様子がおかしい。

ぼくは慌てて、

「わしがわるかった。かいじい、きげんなおして、わしのはなしをきけや。ごふんだけでもいい」

「わたしはいつも、ごきげんです」

「へんなおじさんはのう、へんなおじさんなんじゃ」

「ですから、どう変なのか、それが問題です」

「わしに、しょうぶしてくれ、と」

「それで」

「まあ、わしも、たのまれたら、どうにもことわれないしょうぶんじゃからのう」

「それで、勝負したんですね」

「じゃんけんぽん、じゃ」

「ぐーちょきばー、ですか」

「かいじいよ、いま、わしのかおみて、ばーいうたじゃろ」

「誤解です。わたしは金ちゃんのうしろで、おぼけがわるさしそうなので、それで見ただけです」

「うそこけ。わしのうしろにや、なにもおらん」

しかし、ふりむけませんでした。

変なおじさんが、いそうな気がしたのです。

「そういう勝負なら、金ちゃんの勝ちでしょう」

「それがのう。まけると、くやしがってのう。かつまでやるんじゃ」

「それなら、【あららかま】というおばけですね」

「おかまの、おばけかのう」

「【あららかま】が、おかまかどうかはよく知りません。でも、【あららかま】が、負けず嫌いなのは有名です」

「負けずぎらいだから、【あららかま】かい。だば、わしだつて【あららかま】じゃ」

「それはその」

懐爺は珍しく困った顔をしました。

「よつて、わしと【あららかま】のしょうぶは、おたがい負けずぎらいどうしじゃからのう。いつまでも、じゃんけんぼんやつとる」

「きりがありませんね。でもどうやって終らせたんですか」

懐爺に質問されるのは、わるい気がしません。

「まけたほうが、かったことにしたんじゃ」

「なるほど。負けるが勝ちですか」

「そんなら、かったほうはかったで、きぶんいいし、まけたほうはかったということだから、きぶんはわるくない」

「それで【あららかま】は、どこに行きましたか」

「どこにもいかん。どこかわからん。わしがさきにかえったからのう」

「なら、わたしがあとで探してみましよう」

「かいじいも、【あららかま】と、しょうぶするんか」

「いえいえ、負けず嫌いとか負けじ魂というものの、愚かさをおしえてあげるのです」

「そんで、【あららかま】が、かいじいのいうことを、りかいしたら、どうなるのかのう」

「もう、村はずれに、変なおじさんは出沒しないでしょう」

「やめとけ、かいじい。それも、さびしいでのう」

「金ちゃんがそういうなら、行くのはやめておきます」

「やくそくじゃぞ」

「約束です」

しかし、懐爺は、ぼくとの約束を破つて、村はずれに行ったにちがいありません。

なぜなら、それから【あららかま】の姿を、まったく見なくなりましたから。

ところがその後、村はずれで【あなかま】と名のる、男でもない女でもない、変なお面をかぶったおじさんに会ったという子供が何人もいたから、それは【あららかま】の変相だったのかもしれない。

なお、どうしておじさんだったかというと、おじさんの声をしていただけからだそうです。

お面をかぶっても、声でばれますね。